

論文の内容の要旨

論文題目：『日本書紀』の「歴史」と朝鮮
—世界構造と世界理念—

氏名 キムジョンヒー
金静希

『日本書紀』（以下『紀』と略称する）については、古来からその中の記事の真偽をめぐる様々な論争が繰り返されてきたが、それは部分に対する断片的な研究であり、テキスト全体に対する前提は常に『紀』が「史実」を語る史書だということであった。そのような認識は韓国における最古の史書である『三国史記』に対しても同じである。しかし、同じ時期を語る両書が相容れない内容（日朝関係）を含んでいるために、日韓の古代史を巡る論争は絶えず、場合によっては民族感情と相まってお互いに自分たちのテキストに基づいて相手のテキストを虚構、矛盾、偽書だと攻撃することになる。

ここで、平勢隆郎『『史記』二二〇〇年の虚実』の指摘は示唆するところが大きい。平勢氏は、『史記』の夥しい年代矛盾について丹念に調べ、『史記』が複数の正統のうち、漢武帝期の正統観の下で 周を正統として選び、それに継ぐ秦・漢を語ろうとしたという。その過程で始皇帝は「負」の立場におかれ、選ばれた歴史の枠組みから外れた楚と越は一楚・越・漢の三帝鼎立の時代ではなく一蛮夷として取り扱われることになったという。『史記』がいかにも「虚」の世界を造り、それが時を経るにつれてどのように増幅されてきたのかを語る平勢氏の論著は、史書と呼ばれるものに対する信頼を改めて考えさせるものであったといえよう。

このようにテキストごとに異なる歴史が語られている可能性を認めるとすれば、虚構だと罵る以前に、まずはそのテキストが何を語るためにそのように書かれて

いるのかを問わなければならないのではないか。しかも『古事記』（以下『記』と略称する）にも『紀』に類似した内容の朝鮮関連記事が記されているが、その分量の多いこと等から、『紀』の方が『記』より国際情勢に関心が多かったという認識に止まり、『記』と『紀』の朝鮮記事全体を、それぞれのテキストが語ろうとした世界観に基づいて比較分析しようとした試みはなされてこなかったといえる。

そこで、本論文は『紀』が『記』にない「高麗」「任那」を語ることに着目し、なぜ『紀』は『記』とは異なる朝鮮関連記事を載せざるをえなかったのか、そのような記事を通して『紀』はどのような世界を標榜しようとしたのかを明らかにした。

論文構成は三章立てで、『記』になく『紀』には表れる「三韓」、「任那と任那日本府」、「化」をキーワードにして、一章、二章は『紀』の世界構造の問題を、三章は世界理念の問題を中心に探ってみた。

第一章は中国正史や古代金石文、『記』『紀』に表われた「韓」を比較し、『紀』以前の日本上代文献では語られることのなかった「三韓」の特異性に触れ、『紀』がこの「三韓」の記事を通して何を語ろうとしたのかを見ようとした。これらを通してこの章では『記』と『紀』の朝鮮記事の全体の枠組み、世界を区分する意識が確認できた。『記』では、倭を中心軸として様々な国（呉・百済・新羅・韓）が倭をめぐる関わってくるが、『記』は世界を明確に区分しないため、百済からの人・文物の渡来を語るところでいきなり呉人が現れたり、百済池を新羅人が造ったとしたりすることができる。これは『記』の神代に、葦原中国を中心軸として水平的関係にある黄泉国、海神国、根之堅州国が関わり（神野志隆光『古事記の世界観』）、スサノヲが母のいるはずの黄泉国ではなく、母のいる根之堅州国に行きたいといったことと同じ語り方である。このような世界観の中で「韓」は否定的なイメージを持たず、文物・技術の渡来を表象するものとして表れることになる。

それに対し『紀』の世界は、戦国時代に表れた中国の「中華思想」（中心の中国、周辺の蕃国・朝貢国）を模倣してつくった日本流の中華的世界観（中心の日本、蕃国・朝貢国＝三韓・高麗、隣（珍）国＝唐）に基づいて語られている。

『紀』の「韓」は天皇に服従する国、朝貢国としての国であるため、『記』のように「鍛冶技術」や「養蚕の術」を伝えてくれた国としては表れず、『記』にない否定的なイメージで叙述されることになる。

また、同じ蕃国・朝貢国でも、『紀』には三韓（百済・新羅・任那）と高麗を区分する意識が働いている。従来の説によると、中国正史における「三韓」は三国時代（高麗・百済・新羅）以前にあった朝鮮半島南部の馬韓・辰韓・弁韓を指すが、隋唐代に三国（高麗・百済・新羅）＝三韓という呼び習わしがあり、

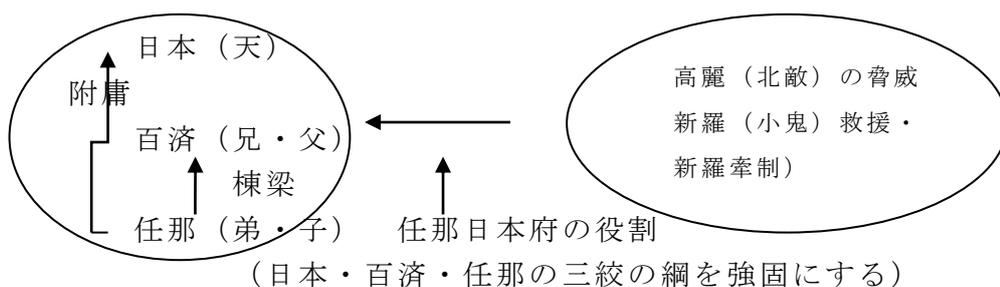
『紀』もそれに基づいて三国（高麗・百済・新羅）を三韓と名づけるようになったと言われている。しかし、本論文では、『紀』は「三韓」を「内官家」（天皇・皇室に対して調が義務づけられるところ、内官家が設置されたところは百

濟・新羅・任那)と規定し、天皇の天下支配を支える土台として意味づけたことを明らかにした。単に文物の渡来を表象する『記』の「韓」とは違って、『紀』は『記』にない「三韓」をもって天皇の世界の底辺を築いているのである。

第二章は、高麗と同じく『記』にはなく『紀』にのみ表れる任那と任那日本府についてであるが、現在の任那研究は任那日本府研究に引きずられてそれ自体では正当に研究されず、任那日本府についても、それが『紀』にしか表れていないにも関わらず、「任那日本府＝外交を目的とした使者官人説」など、何の外交なのか不明な『紀』から離れた研究が主流をなしている。そこでこの章では、『紀』の語る世界全体の構造に基づいて任那と任那日本府を把握しようとした。それにヒントを与えたのは、中国正史や好太王碑文（広開土王碑文）における朝鮮諸国の表れ方である。要するに、強盛な高麗に対して倭と朝鮮南部の連合戦線が築かれ、特に任那と倭は友好的関係にあったということである。『紀』の世界もこれらと類似した内容、即ち、「強敵」として示される高麗に対して、倭・百濟・任那の連盟関係、そして日本に服従しながらも、場合によってどちらにもつく新羅を語っている。

これについて任那日本府を含めてまとめると次のようになる。

- 区宇（唐・高麗・日本などを含む全世界）
- 天下（天皇の治下）
- 三韓（任那・百濟・新羅：天皇・皇室に対して調が義務付けられる内官家）
- 任那（天皇に対する附庸：天皇の名を負い、天皇に調役を奉る国）
- 任那日本府（天府：軍部としての要塞）



第三章は『紀』が『紀』独自の「化」という世界理念をもって朝鮮諸国の人々を天皇の治下に収斂させようとしたことを確認した。この章ではヒボコ物語について述べているが、今までヒボコ物語については神話・説話的側面で研究がなされており、なぜ『紀』が『記』とは異なるヒボコ物語を語っているのかについては論じられてこなかった。しかし、ヒボコ物語は『記』『紀』の世界認識の相違をもっともよく表しているところなのである。

『記』は『紀』とは違って、ヒボコと在来の神（阿加流比売神）、また、在来の神（春山）と渡来の神の子孫（阿伊豆志袁登比売神）の婚姻を語ることで、海

を渡ってきた人・物と土着神の結合を示す。このような婚姻物語は、『記』の倭が外部からの呼び表しもなく、他の諸国ともまるで同じ言語空間の中にあるかのように語られることと無縁ではない。要するに『記』の世界は、血縁で結ばれ「礼」で規範付けられている氏族社会、異族を含まない世界としての「天下」を標榜しているのである。そのような世界像の中でヒボコ物語は婚姻と血縁物語として語られるしかなく、百済と新羅は異族ではなく、倭という中心の周辺にある諸国として語られることになるのである。

それに対し『紀』におけるヒボコは、在地の神との結合も皇室との繋がりも持たない。『記』が神（物）・人の渡来を言ったのに対し、『紀』は物も人も朝貢と「化」の理念に基づいて天皇の世界へと帰属していく物語なのである。また、『紀』はヒボコの「来帰・化帰」を語るが、今まで「来帰」は「帰化」と同じ概念と見なされてきて、新羅王子の来帰と任那王子の帰化を区別せずに扱ってきた。しかし、任那王子の帰化があったからこそ、任那は天皇の名を負うことができ、天皇の附庸として位置づけられるのである。『紀』の「化」は『記』とは違って、神代に表れなかった異族を天皇の世界に収斂させる政治的イデオロギーとして働いていたのである。

今までの歴史家たちは、全体のテキスト分析なしに安易に朝鮮記事を「記・紀」の記事として一概に説明し、他の史料と比較して事実を探っている。勿論、歴史的な事実があったはずである。しかし、テキストが何を言おうとしてそのような叙述をするのかを見極めないまま史実を問うては、終わりのない歴史論争が繰り返されるだけである。

本論文は、テキストの中の「歴史」を究明していく事が真実の歴史を探る事より先行されるべきではないかという問題意識から出発し、その最初のきっかけを『記』とは異なる『紀』の世界に求めることで、テキストごとに異なる虚構の「歴史」を確認し得た。